

【雑感】 2026 年 7 月 15 日掲載

戦理「優勝劣敗」のアラカルト

2 等陸佐 樋口俊作

はじめに

陸上自衛官が時折参照する『戦理入門』（1994 年版）には、「戦理とは『戦いにおいて、戦勝を得るための根本的な原理及び原則』であり、原理は必然的な理を、原則は蓋然的な理を表している。原理は『優勝劣敗』唯 1 つ¹」と記載されている。また、同書はこれまで 1969 年版、1975 年版、1994 年版が発行されており、1994 年以前の版には戦理は理論であると記載されている²。「優勝劣敗」は理論であり、戦理であり、原理でもある。

『戦理入門』は、陸上自衛隊の幹部の選抜試験である指揮幕僚課程受験のために必読と紹介されたこともある³。かつて同課程の受験勉強をした者なら「優勝劣敗」が戦理であり、戦理の中でも原理とされていることはほぼ前提として共有されている理解だろう。

この記事は、「優勝劣敗」という語に焦点を当て、陸上自衛隊等の用兵論に関連するいくつかの側面を述べるものである。節ごとに文章の性質も長さも異なることから、アラカルトとした。

なお、陸上自衛官が編纂に関わり、そして、陸上自衛官の必読書とされていたとしても、『戦理入門』は陸上自衛隊の教範ではない。よって、同書に記載されていることは陸上自衛隊の組織的な見解ではない。

文章内に登場人物の職業を記載しているが、この記事に関係する肩書を用いている。中には、その人物が一般に知られる肩書以外の形での紹介となっている場合がある。

最後に、この記事のような雑感ではなく、戦理「優勝劣敗」をより深く批判的に研究した論文を日本陸軍用兵思想史研究者の前原透が『陸戦研究』へ投稿しているので紹介する⁴。この記事では触れていないフランス軍人アントワーヌ＝アンリ・ジョミニ(Antoine-Henri Jomini)や同フェルディナン・フォッシュ(Ferdinand Foch)の影響、戦後に存命中だった旧陸軍人らの影響などが考察されている。関心のある方は閱讀されたい。

¹ 陸戦学会戦理研究会編『戦理入門』（陸戦学会、1994 年）21 頁。

² 陸幹校戦理研究委員会『戦理入門』（田中書店、1969 年）18 頁。

³ 一例として、「陸戦学会参考図書案内」『陸戦研究』2012 年 11 月号、80 頁。

⁴ 前原透「『戦いの原理』を『優勝劣敗』とする考え方について」『陸戦研究』第 463 号、1992 年 4 月号、1-28 頁。

1 マルサスから “the superior wins, the inferior loses” へ

本節では、「優勝劣敗」という語の由来と変遷を確認する。

(1) 『人口論』から社会進化論へ

本項では、イギリスの経済学者であるトーマス・マルサス(Thomas Robert Malthus)の『人口論』(1798年)を起点として、社会進化論への展開を確認する。

マルサスは、人口は等比級数的に増加するのに対して、食料生産は等差級数的にしか増加しないため、人口増加と食料生産の不均衡が生じると述べる⁵。彼の著書『人口論』では、このアンバランスは貧困や飢餓などの様々な事象を引き起こすとされる。その中には戦争や植民地の獲得も含まれる⁶。

マルサスの議論は人間を対象としたものであった。この議論を動植物にも適用したのがイギリスの生物学者チャールズ・ダーウィンであった。進化論の書籍として現代でも有名な『種の起源』(初版 1859年)には、マルサスを参考にしたことが明記されている⁷。生物の種には多数の変異が生じており、その変異の中で「有利な個体差および変異の保存と有害なものの滅亡⁸」が生起することを、彼は当初「自然淘汰(natural selection)」と名付けている。

イギリスの社会学者ハーバート・スペンサーは、著書『生物学原理』(1864年)においてダーウィンが「自然淘汰」と呼んだ事象を「適者生存(survival of the fittest)」と言い換えている⁹。その後ダーウィンは、スペンサーの「適者生存」の方が「自然淘汰」よりも適切で便利であることを認めており¹⁰、後の版の『種の起源』では「自然淘汰」と並んで「適者生存」という語が用いられるようになった。

スペンサーは哲学、社会学、生物学、教育学など幅広い分野の書籍を著している。ここでは、「自然淘汰」や「適者生存」に関連するものに限定して、彼の主張を見てみよう。スペンサーは、ダーウィンの『種の起源』に先立って、人間社会において不適合者が淘汰されることを肯定する内容を含む書籍を出版している。

⁵ マルサス『人口論』齊藤悦則訳(光文社、2011年)28-30頁。

⁶ 同上、49-53頁、87-94頁。

⁷ チャールズ・ダーウィン『種の起源(原書第6版)』堀伸夫、堀大才訳(朝倉書店、2001年)3頁。

⁸ 同上、68頁。

⁹ Herbert Spencer, *The principles of biology*, Williams and Norgate, London, 1864, https://darwin-online.org.uk/converted/pdf/1864-7_Spencer_Biology_CUL-DAR.LIB.599.pdf, (accessed 2026-06-08) pp. 444-445.

¹⁰ ダーウィン『種の起源』52頁。

彼がいくつかの書籍で主張していることは、国家による弱者救済（救貧法）の否定である。1843 年の著書『政府の適正領域』において、救貧法は貧困を長続きさせたり、国民の性格を低下させたりすると述べている¹¹。その理由を簡単に述べると、国家が弱者救済を行おうとすると、勤勉で賢明な者は個人で弱者を救おうとしなくなるし、貧しく怠惰な者は賢慮と努力を怠るようになるからだという。スペンサーの 1851 年の著書『社会静学』でも、同様の主張は繰り返されている¹²。

スペンサーは『種の起源』後も意見を変えておらず、例えば『人間対国家』（1884 年）では以下のように述べている。人が社会状態に適合する過程において困苦は必ず生じるものであり、その困苦を解消しようと国家が介入すると、結果的に「生存に一番適しない人々を大量に生み出し、その結果として、生存に一番適した人々の繁殖を妨げる¹³」ことになる。だから、国家は貧しい人を救おうとするのではなく、放置して勝手に淘汰されてしまう方が社会全体にとっては良いという。

スペンサーはマルサスを参照して人口に関する論文を発表していることに加え¹⁴、マルサスの名前は先に取り上げた『社会静学』の中にも登場している¹⁵。社会不適合者が増えると適合者が増えないという考え方の背景には、マルサスの述べる人口と食料のアンバランス問題も関係している。ちなみに、マルサスの『人口論』にも救貧法を批判する記述がある¹⁶。

スペンサーやダーウィンの書籍は、イギリス以外の欧米各国でも翻訳されている。また、彼ら以外の学者や論者なども進化を論じており、競争と淘汰によって社会は進化するという社会進化論の 1 つの潮流を形成していく¹⁷。

（2）社会進化論から「優勝劣敗」へ

スペンサーやダーウィンの著作を発表した 19 世紀半ばの日本では、開国や外国との不平等条約の締結、明治維新という歴史的イベントが生起しており、国家を挙げて西洋に追いつ

¹¹ ハーバート・スペンサー『ハーバート・スペンサー・コレクション』森村進編訳（筑摩書房、2017 年）21-30 頁。

¹² Herbert Spencer, *Social Statics*, John Chapman, London, 1851, <https://oll.libertyfund.org/titles/spencer-social-statics-1851>, (accessed 2026-06-10) chap. 25, sec. 6.

¹³ スペンサー『ハーバート・スペンサー・コレクション』355 頁。

¹⁴ 矢野卓也「ハーバート・スペンサーにおける『風土』と政治」『ヨーロッパにおける政治思想史と精神史の交叉』（慶応義塾大学出版、2008 年）251-252 頁。

¹⁵ スペンサー『ハーバート・スペンサー・コレクション』209 頁。

¹⁶ マルサス『人口論』109-110 頁。

¹⁷ 本文のみでは誤解を招きかねないので補足する。ごく簡単に言えば、スペンサーの進化論は、社会も生物も単純なものから複雑化、機能等の分化を経て総合に至るというものである。彼は競争と淘汰を前面に押し出していたわけではない。

く努力をしていた。当時、欧米を風靡していた彼らの著作や社会進化論も日本に紹介されている。

日本で社会進化論を特に広めたのは、東京大学初代総理の加藤弘之の著書『人権新説』（初版 1882 年）であったという¹⁸。同書には「優勝劣敗」という語が用いられている。加藤は執筆に当たりドイツとイギリスの各種書籍を参照しており¹⁹、「優勝劣敗」はドイツ語の「適者生存」に相当する語から訳出されたようである²⁰。『人権新説』が読まれ、また批判される過程で、「優勝劣敗」という語も日本国内に広がっていったと考えられる。なお、当時の中国でも社会進化論は広まりを見せていた。それに合わせて、中国でも「優勝劣敗」という語が普及しており、語の起源は日本からの重訳のようである²¹。

ところで、「優勝劣敗」を国内に広めたのが加藤だったとして、その語を作り出した最初の人物も彼だったのだろうか。『人権新説』の起稿は 1881 年 12 月であり、初版の出版は翌年 10 月だという²²。国立国会図書館デジタルコレクションで検索してみると、彼が起稿したという 1881 年に分類される史料に、専修学校（後の専修大学）の創立者の一人駒井重格の講義録『経済考徴』があり、この中に既に「優勝劣敗」が登場している²³。彼はアメリカへ留学し、経済学を学んでいる。ただし、この書籍に奥付は無く正確な発行時期は不明であり、史料受入施設によるものと思われる「M14」（明治 14 年は 1881 年）が付記されている²⁴。デジタルコレクションの年代区分はここから判断されたものだろう。

同じく 1881 年とされる史料に専修学校の講師中隈敬蔵の講義録『経済原論』があり、自由競争の部分で「ダルヴィン氏ノ所謂自然淘汰、優勝劣敗ノ理²⁵」と記載されている。「自然淘汰」と「優勝劣敗」の両方が記載されていることから、それぞれダーウィンの“natural selection”と“survival of the fittest”の訳であると分かる。やはり『経済原論』にも奥付がなく、史料中に受入施設によるものと思われる「M14?」という記載があり、正確な発行時

¹⁸ 田中由香里『＜優勝劣敗＞と明治国家 加藤弘之の社会進化論』（ペリカン社、2019 年）8 頁。

¹⁹ 同上、75-85 頁。

²⁰ 同上、89 頁。

²¹ 陳力衛『『優勝劣敗、適者生存』——進化論の 中国流布に寄与する日本漢語』『成城大学経済研究』第 2 10 号、2015 年 12 月、<https://warp.ndl.go.jp/web/20260315113957/https://www.seijo.ac.jp/education/faculty/academic-journals/jtmo420000001iji-att/a1452235092231.pdf>（参照 2026-06-08）247-271 頁。

²² 田中『＜優勝劣敗＞と明治国家』71 頁、86 頁。

²³ 駒井重格 述『経済考徴』（専修学校、1881 年）国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/799167>（参照 2026-06-05）134 コマ目。

²⁴ 同上、303 コマ目。

²⁵ 中隈敬蔵 述 ほか『経済原論』（専修学校、1881 年）国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/799153>（参照 2026-06-05）、94 コマ目。95 コマ目にも同じ記述がある。

期は不明である。中隈は 1881 年当時、専修学校には着任していないはずなので²⁶、より後年の史料と考えられる。

上記の 2 つの史料は発行年が不明確であることに加え、『人権新説』の執筆以前から加藤が「優勝劣敗」を書籍以外で使用していたということも考えられるため、彼が最初の 1 人である可能性を否定はしない。しかし、漢学は江戸時代後期には日本国内で広がりを見せていたし、維新前後は多くの人々が欧米諸国から知識を導入しようとしており、社会進化論に触れる機会もあったはずである。可能性だけから言えば、明治初期に和製漢語「優勝劣敗」を思いつくことができた人物は加藤以外にも多くいたと考えられる。筆者は、最初の 1 人を示す明確な史料の存在を期待したい。あるいは、日本近代史や言語学に詳しい者なら最初の 1 人を知っているのだろうか。

（３）「優勝劣敗」から “the superior wins, the inferior loses” へ

日本陸（海）軍でも「優勝劣敗」は使用されている。陸軍省が発行していた統計年報には、1884 年を対象にした巻に「優勝劣敗」が登場している。該当箇所は兵器の改良を論ずる部分であり²⁷、進化と無関係とまでは言いきれないものの関連は薄く、「適者生存」の意味は読み取れない。

用兵関連の書籍にも「優勝劣敗」は浸透してきている。ペンネーム雲外居士による『基本戦術摘要解義 上巻 1・2 編』（1900 年）には「優勝劣敗、強ハ弱ノ肉ヲ食フノ日ニ在ツテ唯タ恃ムヘキハ兵ナリ²⁸」とされている。ここでは単純に強い者が弱い者に勝つという意味で用いられている。この言い回しは同時期の別の戦術書にも確認できるため²⁹、軍人の目に触れることも多かったのではないだろうか。ちなみに海軍でも、後に海軍大学校の校長になる佐藤鉄太郎が著書『帝国国防史論』（1910 年）で「優勝劣敗」を度々用いている。

大正期における軍での用いられ方を見てみよう。日清、日露戦争に従軍した陸軍軍人佐藤鋼次郎による『皇国の興廃』（1918 年）には「優勝劣敗、弱肉強食の現代に在つて³⁰」や「民

²⁶ 原田道寛 編『大正名家録』（二六社編纂局、1915 年）国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/954637>（参照 2026-06-07）356 コマ目。

²⁷ 『陸軍省年報 第 10 年報』（陸軍省、1881-1887 年）国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1152171>（参照 2026-06-05）180 コマ目。

²⁸ 雲外居士 著『基本戦術摘要解義 上巻 1・2 編』（川流堂、1900 年）国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1086766>（参照 2026-06-05）21 コマ目。

²⁹ 鴻究学会 編『戦術綱要』（有則軒、1899 年）国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/844140>（参照 2026-06-05）24 コマ目。

³⁰ 佐藤鋼次郎 著 ほか『皇国の興廃』（東亜堂書房、1918 年）国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/933667>（参照 2026-06-05）166 コマ目。

族間の優勝劣敗、弱肉強食³¹」という記述がある。日露戦争に従軍した伊藤政之助による『戦術戦史講話』(1925 年)には、「人類の歴史は全く戦の歴史であつた、優勝劣敗の史実であつた³²」という記述がある。海軍では、岩佐重一による『軍人精神の修養』(1913 年)に「世界は生存競争の社会である。優勝劣敗と云ふ事は、萬世に渉つた真理である³³」という記述がある。「優勝劣敗」は歴史や世界の摂理であるとする言説が用いられるようになり、また、「優勝劣敗」が「弱肉強食」と同義で用いられるようになってきている。

ここで紹介した以外にも「優勝劣敗」という語を使用した軍事書籍は多くあり、筆者もその全てに目を通せたわけではない。しかし、ここに挙げた事例だけでも、「優勝劣敗」が軍や軍事界に浸透してきたこと、そして、意味が「適者生存」ないしは進化論から離れ、文字通り強い者が勝つことを表すようになっていったことは示せたものと考えている。

なお、各兵科操典、『戦闘綱領』や『作戦要務令』、『統帥綱領』や『統帥参考』といった軍の公的な戦い方を示した書籍には、管見の限り「優勝劣敗」という語は見当たらない³⁴。用兵論に限れば、この語はあくまで個人や私的サークルによる書籍で用いられていたようである。これは陸上自衛隊の教範でも同じで、一般公開されている範囲の『野外令』や『野外幕僚勤務』に「優勝劣敗」という語は見当たらない。

話を『戦理入門』に移そう。予備知識を持たないまま『戦理入門』を読んだ場合、「優勝劣敗」が“survival of the fittest”の訳であり、「適者生存」と元々同義語であつたと認識することは難しい。そもそも、同書には「優勝劣敗」の内容に関する説明が一切ない。おそらく、文字を見れば自ずと意味も分かると考えたのだろう。「優勝劣敗」は、「適者生存」から意味が離れて陸上自衛隊での地位を築いているように思われる。逆にその由来を知っている自衛官が「優勝劣敗」を英訳しようとしても、“survival of the fittest”とは訳さないであろう。ちなみに 1969 年版の『戦理入門』は米陸軍で英訳されており、そこで「優勝劣敗」は“the superior wins, the inferior loses”と訳されている³⁵。

2 <余話> スペンサーから用兵理論へ

³¹ 同上、219 コマ目。

³² 伊藤政之助 著『戦術戦史講話』(同文館、1925 年) 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/942287> (参照 2026-06-07) 28 コマ目。

³³ 岩佐重一 著『軍人精神の修養』(広文堂書店、1913 年) 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/951847> (参照 2026-06-05) 220 コマ目。

³⁴ 補足すると、『統帥綱領』には有利という意味で用いられている「優勝」という語はある。

³⁵ Dr. Joseph West, “Principles of war: A translation from the Japanese,” Fort Leavenworth, Kansas, <https://www.armyupress.army.mil/Portals/7/combat-studies-institute/csi-books/PrinciplesOfWar.pdf>, (accessed 2026.06.08) p. 10. 序章の説明によれば、自衛隊が派遣していた連絡官を通じて米軍に紹介され、Dr. Joseph West によって翻訳されたという。

“survival of the fittest”という語を生み出したスペンサーは、陸上自衛隊の戦理以外にも世界の用兵論に間接的ながら影響を与えている。

陸上自衛隊は「戦いの原則」を採用しており、内容上の由来を辿ると英陸軍人ジョン・フラー(John Frederick Charles Fuller)に行き着く。また、陸上自衛隊以外にも、彼に由来する「戦いの原則」を採用している軍はいくつもある。彼が著書 *The foundations of the science of war* (1926 年) で論じている「戦いの原則」は陸上自衛隊が採用したものとやや異なっており、特に「経済」の扱いが異なっている。陸上自衛隊が採用している原則には「経済」の原則がある一方、*The foundations of the science of war* の「戦いの原則」に「経済」は含まれていない。「経済」は、より高位の「戦争の根本的な法則」と称されており³⁶、「戦いの原則」は「経済」を達成するための手段という、一段階下位に位置づけられている³⁷。

同書では序章からスペンサーへの言及が確認でき、フラーはスペンサーを師であり導き手と称している³⁸。そして、「力の経済の法則」の章で積極的に引用されているのが、スペンサーの著書『第一原理』(1867 年)である。『第一原理』には人の行動、社会的・経済的な活動や、物体の運動といったものが、労力や抵抗が少なくなる方向で生起するよう、つまり、少ない力で大きな効果を得るよう効率的(すなわち経済的)な形態で生起することを論じている章がある³⁹。

また、フラーは機動戦の源流の 1 つである麻痺の有効性を論じたことでも有名である。同じく *The foundations of the science of war* では、敵部隊を物理的に破壊することだけでなく精神的に麻痺させることの重要性のほか⁴⁰、頭脳や指揮系統への打撃の有効性が論じられている⁴¹。この議論の前提には、軍隊が単なる人の集まりではなく、中央によって統制された有機体であるという見方が必要になる。スペンサーの『社会学原理』には、「社会は有機体である」という章や「統制システム」という章があり、社会の発達やそれに伴う統制システムの登場が論じられている⁴²。

³⁶ J. F. C. Fuller, *The foundations of the science of war*, Fort Leavenworth, Kansas, 1993, <http://www.armyupress.army.mil/Portals/7/combat-studies-institute/csi-books/Foundationsof-Science-of-War.pdf>, (accessed 2026-06-08) p. 202.

³⁷ Ibid., p. 220.

³⁸ Ibid., pp. 195-196.

³⁹ Herbert Spencer, *First Principles*, 2nd ed, Williams and Norgate, London, 1867, <https://oll.libertyfund.org/titles/spencer-first-principles-1867>, (accessed 2026-06-08) CHAPTER IX.: THE DIRECTION OF MOTION.

⁴⁰ Fuller, *The foundations of the science of war*, p. 285.

⁴¹ Ibid., p. 292.

⁴² Herbert Spencer, *The Principles of Sociology*, vol. 1, D. Appleton and Company, New York, 1898, <https://oll.libertyfund.org/titles/spencer-the-principles-of-sociology-vol-1-1898>. (accessed 2026-06-08) CHAPTER II.: A SOCIETY IS AN ORGANISM; CHAPTER IX.: THE REGULATING SYSTEM.

このように、*The foundations of the science of war*におけるフラーは、スペンサーを土台に使用して自説を展開している。著名なフラー研究者であるブライアン・ホールデン・レイド (Brian Holden Reid) によれば、フラーは戦争研究に総合哲学を導入することで、戦争研究をそれ以外の学問分野と連携させようとしていたという⁴³。フラーは同書の発行以前から「戦いの原則」や麻痺について論じており、そこにスペンサーは登場していない。このため、これらはスペンサーから得られた着想というよりも、自らの発想をスペンサーで理論づけようとしたと考えたほうが適切なようである。しかし、たとえ「戦いの原則」や麻痺に関してスペンサーが後付け的に使用されていたとしても、フラーは第一次世界大戦前からスペンサーの著書に触れていたようであり⁴⁴、彼がスペンサーの影響を受けつつ自らの思考を深めたということは変わらない。

3 One of them から Only one へ 陸上自衛隊に甦る第一原理

3つある『戦理入門』のどの版でも「優勝劣敗」は原理として扱われている一方で、その地位は版で異なる。1975年版までの『戦理入門』では原理の一例として「優勝劣敗」が挙げられており、その他にも原理が存在することが示唆されていた（ただし、例に挙げられているのは「優勝劣敗」のみ）⁴⁵。これに対して、1994年版では原理は「優勝劣敗」唯一つと明言されている。

各版の『戦理入門』では、戦理は時代と共に発展していく性格のもので、時代の流れとともに見直しが必要とされている⁴⁶。しかし、原理のみを見れば、25年を経る間に「優勝劣敗」の原理が変化したり他の原理が発見されたりすることはなく、さらには「優勝劣敗」以外に原理は存在しないことにされている。原理は「優勝劣敗」に純化ないし先鋭化され、「優勝劣敗」は戦勝を得るための唯一かつ必然的な根本原理となっている。

先に触れたように、スペンサーには『第一原理』(1867年)という著書がある。第一原理とは物事に共通する究極の原理 (ultimate law や ultimate truth) のことである⁴⁷。「優勝劣

⁴³ Brian Holden Reid, *J. F. C. Fuller: Military Thinker*, Palgrave Macmillan, 1990, p. 93.

⁴⁴ Ibid., pp. 16-18.

⁴⁵ 陸幹校戦理研究委員会『戦理入門』（田中書店、1969年）18頁；陸上自衛隊幹部学校修親会『戦理入門』（田中書店、1975年）15頁。

⁴⁶ 戦理研究委員会『戦理入門』（1969年）18頁；陸上自衛隊幹部学校修親会『戦理入門』（1975年）14頁；陸戦学会戦理研究会『戦理入門』（1994年）21頁。

⁴⁷ スペンサーは『第一原理』以前から特定分野の究極の原理という意味で第一原理という語を使用している。ちなみに、『第一原理』は原文で *First principles* であり複数形である。『第一原理』ではあらゆる物事の究極の原理としての第一原理と、各分野における第一原理が論じられている。

敗」は陸上自衛隊内において、戦勝に関するいくつかある（はずの）原理の中の1つという地位から、第一原理に格上げされた。

あくまで個人的な所感として、現在の陸上自衛官でスペンサーの名前を知っている者はほとんどいないように思われる。もしかすると、『戦理入門』が発行された当時は状況が違っていたかもしれない。いずれにせよ、発行当時から現在に至るまで、彼の名前を知っている者がいたとしても、自衛官の職務とは直接関係ない哲学、政治史や社会思想といった文脈であり、戦理や軍事理論の由来という文脈で知っている者は稀であろう。『第一原理』や『生物学原理』から130年近くを経てスペンサーが忘れ去られる中、彼に由来する「優勝劣敗」が陸上自衛隊に第一原理として甦っている⁴⁸。

戦理は「現代を含む古今東西の多くの戦史から導き出された戦勝のための理論⁴⁹」であるという。筆者は、戦理が戦史から導き出されたという点が、「優勝劣敗」が第一原理化した背景にあると考える。戦史研究は、その性質上、結果を知った上での後知恵による分析となる。翻って、「優勝劣敗」が当てはまらない戦例はまず無い。子供の喧嘩から企業間競争、国家間紛争まで、争いや競争と名付けられるものの中で、過去の勝敗を「優勝劣敗」で説明できないものは無いのではないだろうか。勝った方は腕力が強かった、資本が多かった、リーダーが優れていた、兵器の質が高かった、国民の士気が高かった、同盟関係が優れていたなど、後付けである限り「優勝劣敗」はあらゆる事例を説明できる。ここまで万能な理論を筆者は他に知らない。まさに原理「優勝劣敗」は必然的な理である。

4 原理「優勝劣敗」を超えるために

科学哲学者であるカール・ポパーは、実験や観察によってその正誤を判断できる可能性がない理論を「疑似科学(pseudoscience)」と称した⁵⁰。接頭語の“pseudo”は「偽りの、にせの、見せかけの」を意味する。「優勝劣敗」は間違っていることを証明できる可能性がない。仮に、今行われている戦争で、筆者が兵数に優れるA国が勝つと予測して、実際にはB国が勝ち、戦勝の要因は兵器の質にあったとしよう⁵¹。これは「優勝劣敗」の誤りではなく、兵数に目を向けた筆者の誤りであって、筆者は兵器の質に目を向けるべきであったのだ。筆

⁴⁸ 本文のみでは誤解を招きかねないので補足すると、スペンサーは「適者生存」を第一原理に挙げていない。

⁴⁹ 陸戦学会戦理研究会『戦理入門』（1994年）21頁。

⁵⁰ カール・R・ポパー『推論と反駁 科学的知識の発展』藤本隆訳（法政大学出版局、1980年）57-58頁、62-64頁。

⁵¹ 冒頭で紹介した前原の論文に基づけば、例に挙げているような勝敗の原因の単純化も批判対象となる。

者が予測を誤っても、原理「優勝劣敗」の正しさに傷はつかない。原理「優勝劣敗」は必然であり、ゆえにポパーに言わせれば疑似科学である。

陸上自衛隊でスペンサーが忘れられているように、現代の社会科学の分野でも彼は参照されることがあまり無いようである。「現在、誰が一体スペンサーを読むだろうか⁵²」というフレーズから始まる書籍がある。タルコット・パーソンズ(Talcott Parsons)の『社会的行為の構造』(原著 1937 年)である(フレーズ自体は別の人物からの引用)。彼は、理論とは事実や知識の単なる集合体ではなく、事実や知識が相互に関係を持ち体系化されたものであると述べた。また、既知の全ての知識が体系化されるのではなく、体系から取り残される知識もあるという。体系化される範囲を示すものがコンセプトと呼ばれ、取り残された部分のことは残余カテゴリーと呼ばれている⁵³。

やや難しく述べたが、ここで言うコンセプトとは普段の生活で例えば「この計画のコンセプトは？」や「これらの商品はコンセプトが同じだ」というように使用される概念のことであり、これが理論の元となるということである。パーソンズは、理論やコンセプトが発展する過程で、残余カテゴリーへの注目や知識同士の体系の再構築がなされるという。

『戦理入門』によれば、「戦理は戦史を観察する場合の尺度でもある。戦理を知り、これを尺度として戦史を深刻に観察・研究し、さらに応用戦術等によって判断力を向上することによって初めて各種事態に対処して適確な判断を行い得るものである⁵⁴」という。同書で推奨されている戦史の観察・研究の方法は、戦理に基づく判断力を向上させることが企図されており、既存の理論やコンセプトに従って戦史を見るという方法である。パーソンズに言わせれば、この方法を取っている限り、戦理の発展はあり得ないとなるだろう。既存の戦理では説明できない事例やそれに合致しない事例(すなわち残余カテゴリー)を発見し、その事例を含められるよう新たな理論体系を作り出すことが戦理を発展させる方法となる。

反証事例が理論の発展に重要であったり、そのきっかけになったりするということは、ポパーもパーソンズも共通している。もし既存の戦理を理解するためだけに戦史を観察すると、戦理を支持する事例ばかりに注目し、不支持の事例を無視してしまう確証バイアスに陥る可能性もある。

パーソンズの弟子である社会学者ロバート・マートン(Robert King Merton)は、「中範囲の理論」を提唱した。中範囲の理論とは、第一原理のように社会全体を包括的に説明する一

⁵² T・パーソンズ『社会的行為の構造／総論(第1分冊)』稲上毅、厚東豊訳、(木鐸社、1976年) 17頁。

⁵³ Talcott Parsons, *The structure of social action, Volume 1 : Marshall, Pareto, Durkheim*, Free press, New York, 1968, pp.3-20.

⁵⁴ 陸戦学会戦理研究会『戦理入門』(1994年) 21頁。

一般理論ではなく、ある程度限定された範囲に適用できるような特殊理論のことである⁵⁵。マートンは、一般理論をいきなり提示するのではなく、様々な特殊理論を開発し、その後に各種の特殊理論をまとめる一般理論を順を追って展開していくという流れを提唱している。

マートンに基づけば、『戦理入門』で「原理は『優勝劣敗』唯1つ」と結論付けているのはやや性急に過ぎるのではあるまいか。あらゆる戦例に共通するという必然的な原理を陸上自衛官が探求する努力を否定はしないものの、マートンによるならば、まず場面や状況を限定して適用できる戦理を積み上げていくことが重要となる。

陸軍軍人で戦後は防衛庁防衛研修所戦史室室長を務めた西浦進は、旧軍は非科学的だったという反省が自然科学のみに向けられ、社会科学がおろそかになることを危惧していた⁵⁶。ここに挙げたポパー、パーソンズ、マートンといった人物の書籍は、20世紀前半から半ばにかけて原著が発行されており、日本語訳は20世紀後半に出版されている。彼らは現代の科学、あるいは社会科学の基礎を成している。同じ20世紀後半に陸上自衛隊で生じた「優勝劣敗」の原理化や、さらに続く第一原理化は科学一般や社会科学の趨勢と逆行するもののように思われ、西浦の懸念が現実になったように感じられる。なお、『戦理入門』の編纂者に西浦は含まれていない⁵⁷。

おわりに

これまでいくつかの記事を書いていて気づくことは、日本陸軍でも陸上自衛隊でも、「教範原則の不変の原則化」とでも呼ぶべき事象が度々生起していることである。本来は組織の指針として解釈すべき典令範や教範などに記載された原則が、いつの間にか、時代や場面を超えて通用する普遍かつ不変の原則として捉えられるようになっている。日本陸軍で昭和初期の『統帥綱領』や『戦闘綱要』で強調されるようになった包囲殲滅は、10年を経ずにそれを不変の原則と捉える者が登場している⁵⁸。陸上自衛隊では、米軍から伝わった「戦いの原則」が、教範での初登場からわずか5年で必然性と普遍性をもつ経験的な原理法則と

⁵⁵ R. K. マートン『現代社会学体系 第13巻 社会理論と機能分析』森東吾、森好夫、金沢実訳（青木書店、1969年）22-25頁。

⁵⁶ 西浦進『兵学入門』（田中書店、1968年）211頁。

⁵⁷ 戦理研究委員会『戦理入門』（1969年）5頁。西浦は1970年に他界している。

⁵⁸ 『戦闘綱要』は1929年、『統帥綱領』は1928年に編纂されており、陸軍大学校「昭和十二年度戦術教育法」（昭和12年は1937年）で、包囲殲滅が不変の鉄則と語られている。日本陸軍で包囲殲滅が重視される契機となったタンネンベルクの戦い（1914年）を起点にすると、不変の原則化は20年余りとなる。

説明されるようになった⁵⁹。『戦理入門』は教範ではないものの、登場した時点から「優勝劣敗」は必然性がある理とされ、25年を経て第一原理化している。

筆者は、「教範原則の不変の原則化」はあまり歓迎される現象ではないように思う。ある指針や原則が必然的な理や不変のものと認識されるようになれば、その後の発展は試みられなくなったり、適切な範囲を超えて適用されたりすることにもつながりかねない。西浦は、「戦訓で一つの不変の定説などというものができるとは、あまり喜ぶべきことではない」と思っている。従来の定説を破るような研究が、次々に行われてこそ、兵学会は活気を帯びてくる⁶⁰と述べている。

筆者はこれまでも「教範原則の不変の原則化」に相当する内容に触れてきたが、調査がまとまれば、改めて記事にしてみたい。

<この記事は個人の見解であり、執筆者の所属する組織や教育訓練研究本部を代表するものではありません。>

⁵⁹ 1952年『作戦原則』で陸上自衛隊に「戦いの原則」が登場し、1957年の『野外令第1部（草案）の解説』で、「戦いの原則」は必然性と普遍性をもつ経験的原理法則とされている。

⁶⁰ 西浦『兵学入門』208頁。西浦は「教訓」の意味を3つ挙げており、その1つに教範上の原則の案出に相当するものがある。